

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月18日現在

機関番号：34305

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820024

研究課題名（和文） ボン教の二真実思想の研究 - 仏教思想との比較を通じて -

研究課題名（英文） Study on the Bonpo Theory of Two Truths in comparison with Buddhist thoughts

研究代表者

熊谷 誠慈 (KUMAGAI SEIJI)

京都女子大学・発達教育学部・講師

研究者番号：80614114

研究成果の概要（和文）：本研究においては、究極的真実（勝義諦）と世俗的真実（世俗諦）という二真実の思想が、インド仏教からチベット仏教、さらにはチベット古来の宗教であるボン教へとどのように展開していったかという、二真実思想史を整理した。とりわけ、これまで国内外において研究がなされてこなかった、ボン教の二真実思想史を整理できたことが1番の収穫である。加えて、ボン教重要文献『中観二諦論』および『中観二諦論注』の校訂テキストおよび和訳・英訳を完成できたことは大きな成果といえる。

研究成果の概要（英文）：In this research I outlined the history of the two truths, that is to say “absolute truth” and “relative truth” from Indian Buddhism to Tibetan Buddhism and also the Bon religion which is an indigenous religion in Tibet. Especially the clarification of its history in the Bon religion is one of biggest results. Complete of the critical edition and Japanese and English translation of an important Bonpo text, *dBu ma bden gnyis* and *dBu ma bden gnyis kyi 'grel ba* is also big achievement.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学（印度哲学・仏教学）

キーワード：ボン教、中観派、二諦

1. 研究開始当初の背景

仏教には、世俗的真実（世俗諦）と究極的真実（勝義諦）の二真実説（二諦説）という思想がある。この思想は、ナーガールジュナ(Nāgārjuna, 龍樹, ca. 150-250)を開祖とする中観派(Mādhyamika)において特に

重要視され、チベット仏教においてはさらに大きく扱われるに至った。

チベット古来の宗教であるボン教は、兼ねてより仏教（とりわけチベット仏教ニンマ派）との教義的類似性が指摘されてきたが、報告者は近年、この二真実説もボン教に存在していたという事実を発見し、すで

にその一部を報告した。しかしながら、それと同時に、ボン教には様々な種類の二真実説が存在していたことが判明したため、ボン教の二真実説がいかなるものであり、それがインド仏教およびチベット仏教の二真実説とどのような関係性(共通点・相違点)を備えていたのかを解明する必要性が生じるに至った。

2. 研究の目的

以上の背景より、ボン教の二真実思想の特性を解明するため、本研究では、ボン教の二真実思想の展開史を文献精読にもとづいて整理し、仏教思想との比較分析を行い、ボン教思想の特性をより体系的に捉えることを主目的とした。

特にボン教は国内外において研究蓄積が少なく、多くの文献写本が未校訂のまま残っている。そこで、ボン教の重要文献の写本校訂や現代語訳の作成を行うことを、本研究の副次的目的とした。

3. 研究の方法

本研究では、主要ボン教文献に見られる二真実説を個別に整理した上で、それらをもとに思想史全体の流れを整理し、インド仏教・チベット仏教思想との比較を通じて、ボン教二真実説の特徴を明らかにした。

とりわけボン教に関しては、以下の3つのボン教重要文献の批判的校訂テキストと英訳・和訳を完成させた。

[1] 11世紀のメトゥン著『二諦分別論』(*dBu ma bden gnyis*)、[2] 11世紀のメトゥン著『二諦分別論自注』(*bDen gnyis 'grel ba*)、[3] 13-14世紀のニャンメー著『二諦分別論注』(*bDen gnyis 'grel ba*)。

これらの著作は、二真実を全体的なテーマとしているため、文献精読作業により二真実思想を詳細に抽出することが可能となる。

4. 研究の実績

本研究の実績は以下の通りである。

(1)インド仏教

原典を参照した上で、インド仏教中観派の二諦説の展開過程を整理した。初期中観派としてはナーガールジュナ(ca. 150-250)、中期中観派としてはバーヴィヴェーカ(*Bhāviveka*, ca. 500-570)やチャンドラキー

ルティ(*Candrakīrti*, ca. 600-650)など、後期中観派としてはジュニャーナガルバ(*Jñānagarbha*, ca. 8c)、シャーンタラクシタ(*Śāntarakṣita*, ca. 725-788)、アティシヤ(*Atiśa*, ca. 982-1054)などを取り上げ、それぞれの特徴を把握した。

(2)チベット仏教

原典を精読した上で、チベット仏教宗義文献における、二諦説の展開過程を整理した。代表的な学僧としては、後期伝播期の最初期に活躍したニンマ派のロンソム・チューキサンポ(*Rong zom Chos kyi bzang po*, ca. 11 cen.)やロクキ・バンデ(*Rog gi ban sde Shes rab 'od*, 1166-1244)、ロンチェンラブジャンパ(*Klong chen rab 'byam pa Dri med 'od zer*, 1308-1363)を扱った。後期伝播期中期に活躍した学僧の中では、ゲルク派の祖とされる宗教改革者ツォンカパ・ロサンタクパ(*Tsong kha pa Blo bsam grags pa*, 1357-1419)や弟子のケードゥップ・ゲレクペルサン(*mKhas grub dGe legs dpal bzang*, 1385-1438)、さらに同時代のサキヤ派のロントウン・シェーチャクンリク(*Rong ston Shes bya kun rig*, 1367-1449)、さらに、後代ではチャンキヤ・ロールペドルジェ(*ICang skya Rol pa'i rdo rje*, 1717-1786)、また、19世紀の無宗派折衷運動の中心人物であるコントウル・ロドゥータイエー(*Kong sprul Blo gros mtha' yas*, 1813-1900)など、各時代の主要学僧たちの二真実説を整理した。

(3)ボン教

一年次(2011年度)には単著 *The Two Truths in Bon* (Kathmandu: Vajra Publications, 2011)を出版し、第1章第3節においてボン教の二真実説の概要を解説した。さらに、第2章～第5章にて、複数のボン教徒の説

を個別に取り上げ分析した。第2章ではメトウン・シェーラプウーセル (Me ston Shes rab 'od zer, 1058-1132) の二真実説、第3章では『乗の解説』 (Theg 'grel, ca. 11 cen.)、第4章ではテトウン・ギェルツェンペル (Tre ston rGyal mtshan dpal, ca. 14 cen.)、第5章ではニャンメー・シェーラプギェルツェン (mNyam med Shes rab rgyal mtshan, 1356-1415) の二真実説を分析した。

中でも現在確認できる最古の論書であるメトウン・シェーラプウーセル(1058-1132 or 1118-1192)著『中観二諦論』および『中観二諦論自注』については、写本にもとづいた批判的校訂テキストおよび和訳、英訳を完成させた。

(4) 2年間の研究の総括

以上の調査から判明した結果は、以下の通りである。

まず、インド仏教の学僧たちは、それぞれ異なる独自の二真実説を構築していった。一方、チベット仏教では、インド仏教の学説を学派ごとに整理することに重きを置き、独自の理論を構成することには消極的であった。その背景としては、チベット人たちにとってはインド仏教は権威が高いため、それらを改変して独自の理論に構築するよりも、インド原典を正確に理解するためそれらを整理することに意識を払っていたことが考えられる。

一方で、ボン教の学僧は、仏教二真実説を適宜取り入れながらも、各学僧がそれぞれ異なる独自の二真実説を構築していったことが分かった。その背景としては、チベット仏教とは異なり、インド仏教聖典に縛られる必要がなく、自由な発想をもって独自の教義を柔軟に展開させていったことが考えられる。とくに、二真実説に関してい

えば、大きく分けて自立論証派系統と帰謬論証派系統との2系統の理論体系が存在することが判明した。ただし、2系統の中でも、学僧ごとに二真実説の詳細は異なるため、その細部にわたる研究をさらに継続していくことが今後の課題となる。

今回の科研による2年間の研究期間中には、英文単著の出版や、複数の外国語論文の出版、さらには国内外の学会にて研究発表を行ってきたことで、研究成果をとりわけ国外に発信できたことは大きな収穫と言える。

今後は、本研究を基盤として、さらなる研究活動・情報発信を推進していくことが望まれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① Seiji KUMAGAI, "Caractéristiques de la théorie des deux vérités en Inde et au Tibet," *Circulaire de la Société Franco-Japonaise des Etudes Orientales* (日仏東洋学会通信), Vol. 34-36, 2013, pp. 15-20. (査読有)

② Seiji KUMAGAI, Gawa THUPTEN and Akinori YASUDA: "Introduction to the Collected Works of the Founder of the *Drukpa Kagyu* ('Brug pa bKa' brgyud) School: Tsangpa Gyare (gTsang pa rgya ras, 1161-1211)," *Buddhism Without Borders: Proceedings of the International Conference on Globalized Buddhism, Bumthang, Bhutan May 21-23, 2012*, Thimphu: Centre for Bhutan Studies, 2012, pp. 36-52. (査読有)

③ 熊谷誠慈, 「チベット・ブータン仏教におけるこころ観—こころを観るワザ」『モノ学・感覚価値研究』, 第6号, 2012, pp. 16-27. (単著)

[学会発表] (計2件)

① Seiji KUMAGAI, "A Study on Religious Minority in Bhutan: The Current State of the *Sakya* School," 3rd International Seminar of Young Tibetologists, Kobe: Kobe City University of Foreign Studies, 2012.

② Seiji KUMAGAI, Gawa THUPTEN ,
Akinori YASUDA: “Introduction to the
Collected Works of the Founder of the *Drukpa*
Kagyü School: Tsangpa Gyare (1161-1211),”
International Conference on Globalized
Buddhism in Kurjey, Bumthang, 2012.

〔図書〕（計2件）

① Marc-Henri Deroche, Joshua Schapiro, Seiji Kumagai and Kalsang Norbu Gurung, *Revisiting Tibetan Religion and Philosophy*, (*Revue d'Etudes Tibétaines* 21), Paris: Centre National de la Recherche Scientifique, 2011.

② Seiji KUMAGAI, *The Two Truths in Bon*,
Kathmandu: Vajra Publications, 2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

熊谷 誠慈 (KUMAGAI SEIJI)

京都女子大学・発達教育学部・講師

研究者番号：80614114